様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：２３９０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０３６４

研究課題名（和文）晩期ディドロ思想の統一的解釈のために―『生理学要綱』の間テクスト的読解―

研究課題名（英文）Essay to interpret synthetically Diderot's philosophy in his last years. Intercultural reading of his Elements de physiologie

研究代表者
寺田　元一（Terada, Motoichi）

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授

研究者番号：９０１８８６８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：『生理学要綱』において、生理学者Hallerからの影響、とりわけ『生理学初歩』の第二仏訳版（1769）の影響が決定的であることを世界で初めて示した。それ以外に従来知られていなかった典拠、例えば、生理学者Larocheの著作などを発見した。ディドロの発生観については、後成説的解釈が主流だが、『要綱』においては、むしろHallerのそれに近い、後成説的変異を認める胚種先在説に移行したことを明確にした。『要綱』結論部の道徳は、17世紀人文主義者Heinsiusの影響を留めており、その小論「ストア哲学讃」（新発見）が、『要綱』と『セネカ論』を結び、晩年のディドロ哲学の統一的解釈に通じることを解明した。

研究成果の概要（英文）：In Diderot's Elements de physiologie, we showed for the first time that influences given by Haller, physiologist, especially by the second French tradition (1769) of the Primae lineae are decisive. We discovered moreover some unknown sources of the Elements, for example, a Swiss physiologist, Laroche's work. Concerning Diderot's conception of generation, an epigenetic interpretation is dominent, but we proved that in his Elements he approaches rather to the preexistence of germs admitting epigenetic changeabilities, in other words, to that of Haller. In the conclusion of the Elements, we admit with G. Stenger a 17th century Netherlandish humanist, Heinsius' influences, whose small dissertation Oratio de Stoica Philosophia, which we newly discovered, was found to have the possibility to unite Diderot's two main works: the Elements and the Essai sur Seneque and to open a new direction of research in order to interpret synthetically his philosophy in his last years.

研究分野：18世紀フランス思想

キーワード：ディドロ　『生理学要綱』　ハラー　生理学　間テクスト的読解　典拠　ストア主義　『セネカ論』

１．研究開始当初の背景

(1) 晩期ディドロの思想については統一像が与えられていない。①『生理学要綱』を中心とする唯物論、②『セネカ論』を中心とするストア派的道徳哲学（「後世」）、③レーナル『両インド史』への寄稿とそれと関わる政治経済思想断片集に現れた反植民地主義・民主主義、以上の三契機を指摘できるが、それらがいかなる全体像をなしているかは明確でない。

(2)③政治経済思想関係の校訂版に未刊のものが多いことも、統一像が欠けている理由の一因である。ただ、『両インド史』校訂版第１巻が 2010 年に出版され、刊行中の『ディドロ全集』でも政治経済思想断片集の近刊が予想され、校訂版不在は近々解消される見込みがあった。

(3)寺田は①関係を中心に研究を進めてきた。『要綱』はヴァンドル写本に基づく二つの校訂版が近年出版され、典拠調査もきちんとなされており、後は典拠の補足的精緻化と、ハラーのラテン語大著『生理学原論』のディドロの転用法を探ること、あるいは校訂版が作られていないドルヴァル写本に基づく校訂版の作成が、主たる課題だと思われた。

(4) ①の精緻な理解に立脚して、②の道徳思想を位置づけて①と②の統一を図り、その上で、③関係の校訂版の出版を俟って、この方面でも典拠との関係を明確にしつつ研究を進め、統一を政治経済思想まで拡げていく。以上が、研究開始の際の背景と理由である。

２．研究の目的

(1) 上述のように、①『要綱』の唯物論を土台に、②『セネカ論』のストア派的道徳の統一的理解へと進み、さらに状況が許せば、③政治経済思想関係著作まで含めて、晩期ディドロ思想の全体像を解釈する、以上が研究目的であった。

(2) ３で述べるように、間テクスト的読解を主要な研究方法とする本研究は、①『要綱』については、校訂版編者の編註にも拘わらず、とりわけハラー『原論』との典拠・転用関係の解明は不十分で、この面を明確にすることを目的として掲げた。原初のテクストの面影を残すドルヴァル写本に基づく校訂版作成も、ディドロの転用法や書法の原型を探るのに必要と思われた。さらに、②や③との統一を考慮すると、『要綱』でなぜ身体(生物)と環境・風土、身体と社会の関係が論じられないのか、も検討課題となった。特に前者はディドロが影響されたモンペリエ学派がヒポクラテスから譲り受けた問題系であり、特に後期メニュレが病気と環境・風土の関係を重視したがゆえに、解明が求められた。

(3)②『セネカ論』関連では、「後世」概念を中心にディドロの規範的倫理学をテクストに即して浮き彫りにすること、その上で、①方面と相性のいい快楽主義・幸福主義ではなく、なぜ規範主義なのか、それはディドロ唯物論の高度化なのか、むしろ観念論化なのか、幸福主義と「死を恐れない」道徳は、ディドロ思想においてはたして整合的に統一できるのか、が研究目的となった。

(4)③政治経済思想については、②よりも①と統一しやすい。ディドロは生物をモンペリエ学派を継承して「諸生命の生命」と捉えたが、この生命観は社会観にも適用できる。社会は諸個人の感性や意見が、商業や交際を通じて共感としての世論（＝ディドロの一般意志であり、共感し合う諸個人の集合的生命＝社会）を構成する形で形成されるからである。これも遠大だが、一応研究目的とした。

３．研究の方法

(1)間テクスト的読解・転用という方法を活かして、従来の『要綱』校訂版に増補改訂を施した私家製校訂版、あるいはドルヴァル写本による校訂版を作成する。特にハラー『原論』やモンペリエ学派の転用法に留意し、ディドロの取捨選択編集による書法を『要綱』について解明する。

(2)晩年の②と③についても、『セネカ論』や『両インド史』・政治経済思想断片集について、間テクスト的読解・転用関係に留意した私家製校訂版を作成する。

(3)『要綱』を中心に据えながら、晩年のディドロにおける書法・思考法を、間テクスト的読解を媒介にして、総合的に捉え返す。

(4)転用的書法からさらに踏み込んで、①、②、③を統一する（あるいは逆に統一を阻害する）晩期ディドロ思想に固有でかつ多様な、ときに折衷的でもある、論理や論理のエレメントを明確にする。

４．研究成果

(1)主として『要綱』に関わる成果

『要綱』の既存の校訂版を導きの糸にして、『要綱』における典拠・転用法を精査した。その結果、18 世紀を代表するスイス人生理学者ハラーからの影響が決定的であり、とりわけ彼の『生理学初歩』（ラテン語）の第二仏訳版（1769、以下『初歩』）が決定的に重要であることがわかった。その成果は、雑誌論文②、学会発表⑥、図書①所収の論攷 Un essai de lecture intertextuelle des *Éléments de physiologie* en comparaison avec sa principale source : les *Primae lineae physiologiae* de Haller (pp. 181-212) において発表された。これらはハラーに関して、従来の校訂版の典拠指示の誤り

を多数発見して訂正するとともに、特に『初歩』について、ディドロがどこをいかに借用・転用して『要綱』を執筆したか、明証的かつ精緻に示している。その借用箇所は本文全体の 30%にも達する。それは『要綱』に関する世界的発見であり、国際的にも高く評価されている。

寺田は当初ドルヴァル写本に基づく新校訂版の作成も視野に入れながら、典拠としてディドロが利用したとされる著作群と両写本の関係を検討していた。典拠のうちハラーが特に重要なことはよく知られており、典拠調査をハラーから始めることは自然であった。ディドロ全集版の校訂者 Mayer は『初歩』よりもラテン語『原論』の重要性を強調し、もう一人の校訂者 Quintilli は『初歩』の重要性を指摘していた。寺田は『原論』も参照しつつ、特に『初歩』がいかに借用・転用されたかを調査し、綿密な対応表を作成した（雑誌論文②、図書①）。その結果、既述の発見に至り、Mayer の『原論』過大視を正し、Quintilli による『初歩』借用箇所指示の誤りも正した。

それまで、既存の二校訂版の典拠指示の信憑性を寺田もある程度認めてきたが、それが一気に崩れることになった。ヴァンドゥル写本による第三の校訂版編集の意義が見えてきた。と同時に、ドルヴァル写本との比較でヴァンドゥル写本を読み進めた結果、前者は最初の完成稿ではあっても、読書ノートの整序の段階は出ず、それに対し後者は未完とはいえ、ドルヴァル写本段階から独自な体系化段階への明確な移行の跡があると考えるに至った。その結果、『要綱』について、全般的な典拠調査によるヴァンドゥル写本を底本とする校訂版編集と、そうした調査・研究に基づく新『要綱』研究の発表へと、研究目的が変化していった。

その研究成果は学会発表①で示した。それには、昨年 10 月から今年 3 月までフランス・ナント大学で G.シュテンガー氏（研究協力者）と共同研究する機会を得て、集中的に研究できたことが大きく寄与している。

①『要綱』典拠調査　ハラーに関しては、『原論』と『初歩』だけでなく、『原論』の発生（生殖）部分のフランス語訳『発生』や『感性と刺激反応性の本性論集』（フランス語）も適宜活用したことを、活用箇所や活用の仕方などを含めて、精緻に調べ上げた。『発生』が典拠として利用されていることを含め、これまで知られていなかった新たな典拠をいくつか発見することができた。*The Monthly Review*、Laroche, *Analyse des fonctions du système nerveux*、Jean Stobée, *Sententiae*、Sénèque, *Lettres à Lucilius* などである。

②『要綱』の写本の読みや句読点の打ち方　典拠が明らかになったことで、ディドロもしくは写字生が写し間違えたと思われる箇所を多数『要綱』のうちに発見できた。このことで、従来の校訂版の本文の読みに訂正を加え、より正確な読解に近づくことができた。

③典拠調査を活かした新たな『要綱』研究の成果　a.「感性」ならびに「連続性」に関して　「感性」はディドロの唯物論的人間解釈の根柢にある概念で、それをめぐってディドロ自身が「感性遍在」を原理としたり（『ダランベールの夢』）、それを単なる仮説としたり（『エルヴェシウス反駁』）、立場が揺れている。研究者の解釈もそれを反映して対立している。今回、典拠を探り間テクスト的読解を進める中で、ディドロの「感性」の土台となる概念「連続性」について、少なくとも異なる４レベルがあることを確認できた。ディドロの「感性」をめぐる立場の揺れは、そうした「連続性」レベル間の矛盾から生じる構造的なものであり、その認識によって、従来の解釈上の対立を越える新たな解釈が可能となった。

b.『要綱』の発生（生殖）観　ディドロは『要綱』で二度に亘って発生（生殖）を問題にしている。両箇所には共通した主張も見られるが、『要綱』内での動物観のレベルの違い−『要綱』では動物観が第１部から第２部へと高次化−から、発生（生殖）を捉えるレベル・文脈も異なっており、そのために発生（生殖）観にも違いが生じている。前の箇所では動物は虫や分子へと簡単に分解し、またそこから動物へと簡単に合成されるものとされる。胚種先在説を主張しはするものの、実際には自然発生説や後成説を彷彿とさせる発生（生殖）観となっている。後の箇所では動物は虫や分子へと簡単に分解されない。動物は胚種（種子）から発生するもので、胚種には、有機組織としての動物を生み出す原理・構造が安定的に内蔵されている。他方で胚種は成長の過程でたえず環境と相互作用し合い、その成長のあり方を変える可変性も有している。その意味で、胚種先在説とは言っても、胚種決定論ではなく、後成性を広く内包した説となっている。以上の解釈は『要綱』の発生（生殖）解釈としても斬新なものであるが、同時に、ディドロの哲学全体の発生（生殖）解釈−後成説が主

流-にも新たな地平を切り拓いている。その地平とは、ディドロの発生（生殖）観は胚種先在説や後成説と一律には規定できず、レベル・文脈に対応して複雑な様相を帯びるというものである。

c.『要綱』結論部の道徳　『要綱』結論では本論からは導出されないセネカ譲りのストア派道徳が展開されている。その鍵を握るラテン語詩の典拠が Daniel Heinsius という 17 世紀オランダの人文学者にあることが 2012 年に G.シュテンガーによって発見された。ただ彼の論攷ではまだ、その詩の一節がディドロの結論の一節の典拠であることが示されただけである。私は、ディドロが書いたとされる『百科全書』項目「ストア哲学」に近代ストア哲学者として Heinsius が登場すること、実際、Heinsius が『ストア哲学讃』という論攷をラテン語で書いており、それとの関係でさらに深く『要綱』結論部を解釈できる可能性を明らかにした。また、同じくストア哲学の影響を受けたスピノザ『エチカ』と、『要綱』結論部の関係についてもテクストに即して、関連を指摘することができた。

この研究発表はフランスのディドロ研究者に高く評価され、フランスで出版社を見つけて校訂版を出すよう要請されている。現在それに向けて、新校訂版づくりを進めている。それが出版されれば、同時代の生理学の文脈との関わりで、『要綱』を精緻に読解できる可能性を広げるだけでなく、ディドロの典拠の転用法など、書法や思考法から、その哲学に迫る可能性を開くことになろう。

④その他『要綱』周辺の研究成果

雑誌論文①と学会発表⑦では、『百科全書』の化学について、最新のフランスの研究を紹介しつつ、独自の読解の成果も踏まえて、それが鉱山学や冶金術と結びついた非常に実践的な学問であり、Venel が主導してモンペリエ学派の学者を動員した産物であることを示した。Venel とディドロの化学観は共通点が多く、ディドロの生理学を解釈するには、その化学観を知る必要があり、この研究をすることで、力やエネルギーなどに関してディドロ生理学の理解を深めることができた。また、『百科全書』の化学について、知られざる新研究成果を日本の化学史研究者に提示したことで、反響も大きく、日本の化学史研究の発展に寄与することができた。

学会発表③では、ディドロがその生理学思想確立に当たって大きな影響を受けたモンペリエ学派の生理学思想を、新ヒポクラテス主義的な内発的文脈で中国医学、特に脈学を受容した成果であることを発表した。中国医学の西洋への伝播を研究する欧米の研究者に、異文化受容の文脈を的確に踏まえた独自な解釈として高く評価された。

学会発表②では、モンペリエ学派のメニュレなどが環境を重視しているのに、なぜディドロ『要綱』では、身体構造や機能の考察に紙数が割かれ、環境が軽視されているのかについて、環境＝風土と占星術との関連なども指摘しながら検討した。これについてはまだ研究が不十分で、さらに掘り下げる必要がある。

(2)主として『セネカ論』に関わる研究

学会発表④において、『要綱』と『セネカ論』、言い換えれば、ディドロにおける自然哲学と道徳哲学の統一の論理を検討するために、自然唯物論の道徳・時間とストア的規範主義の道徳・時間の関係を発表した。参加者の関心は惹くことができたが、まだ、二つの道徳・時間の対立相を明示するに留まっており、その動的連関の論理は見出せていない。上述のように、最近 Heinsius『ストア哲学讃』を発見したので、それを手がかりに再度この問題にチャレンジしたいと考えている。

(3)主として『両インド史』や政治経済思想断片集に関わる研究

学会発表⑤において、中国医学受容に関わる問題とともに、ディドロの反植民地主義を、主として『両インド史』への寄稿部分を元に考察し発表した。ディドロには商業や産業の世界的発達を自然必然性のように見る視点と、それがもたらす摩擦・弊害を共感や規範（世界市民性）によって批判する視点が並存していることを示し、聴衆の関心を惹いた。上の（2）とも関わるが、晩期ディドロ思想を統一的に把握するには、並存をさらに動的連関として捉える論理が必要だが、まだそれは見出せていない。

この面での研究の進展のためには、『両インド史』校訂版の続篇と『ディドロ全集』の政治経済思想断片集巻の刊行が必要だが、ずっと未刊の状態が続いている。

以上のように、２．研究の目的として提起したもののうち、『要綱』に関する成果が突出している。この面では世界的な研究をしていると自負できる。ただ晩期ディドロ思想の研究としては、まだ多く

の課題が残されている。『要綱』研究においても、そこに環境や風土が欠けている理由をまだ見出せていない。その理由を探るためにもメニュレとの関係をさらに追求する必要があろう。また、せっかくHeinsius『ストア哲学讃』という著作を発見できたが、それを媒介項に『要綱』と『セネカ論』をテクストや文脈に即して結びつける研究はまだ緒についたばかりである。政治経済思想関係の研究も校訂版刊行が遅延していることもあり、遅滞しがちである。当面は、Heinsius やメニュレを導きの糸にして、晩期ディドロ研究をさらに進めたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 寺田　元一、『百科全書』における化学、『化学史研究』第 41 巻第 2 号（2014 年 6 月 15 日）、査読有、1-18 ページ

② 寺田　元一、『生理学要綱』の間テクスト的読解–ハラー『生理学初歩』との典拠関係を中心に–、『思想』、2013 年 12 月号、査読無、187-212 ページ

〔学会発表〕（計７件）

① 寺田　元一、Essai d'interprétation des Éléments de physiologie de Diderot. Lecture intertextuelle et édition critique、パリ 10 大学 Colas Duflo 主催セミナー、2017 年３月 28 日、パリ（フランス）

② 寺田　元一、Diderot et《le milieu》en relation, avant tout, avec un vitaliste, Menuret de Chambaud (1739-1815). Recherche hypothétique sur la question : pourquoi Diderot consacre-t-il peu de part au milieu dans les *Éléments de physiologie* ?, 国際 18 世紀学会第 14 回大会、2015 年 7 月 31 日、ロッテルダム（オランダ）

③ 寺田　元一、Traditional Chinese Medicine and Montpellier Vitalism、Globalizing Chinese Medicine in the 17th Century、2014 年 10 月 17 日、プロヴィデンス（アメリカ）

④ 寺田　元一、La morale et la temporalité du matérialisme naturel et celles de la volonté générale chez Diderot、Diderot et le temps、2013 年 11 月 14 日、エクサン＝プロヴァンス（フランス）

⑤ 寺田　元一、Sur l'intervention des encyclopédistes dans deux débats : l'introduction de la médecine chinoise et le développement du colonialisme européen、パリ 13 大学 Pascal Petit 主催セミナー、2013 年 10 月 17 日、パリ（フランス）

⑥ 寺田　元一、Un essai de lecture intertextuelle des *Éléments de physiologie* (EP) basée sur une recherche sur les *Primae lineae physiologiae* (PL) de Haller comme source principale、L'anthropologie matérialiste de Diderot et les sciences、2013 年 10 月 16 日、パリ（フランス）

⑦ 寺田　元一、『百科全書』と化学、日本化学史学会研究発表会（年会）、2013 年 7 月 6 日、東京電機大学千住キャンパス（東京都）

〔図書〕（計１件）

① 寺田　元一　他、Diderot, l'humain et la science、Éditions matériologiques、2017、220 p. (pp. 181-212)

６．研究組織
(1)研究代表者
寺田元一　（TERADA, Motoichi）
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授
研究者番号：90188681

(4)研究協力者
ゲアハルト・シュテンガー（STENGER, Gerhardt）
ナント大学（フランス）・文学人文学部・准教授